

ボードイン書簡について（第一報）

○石田純郎*1 H・ボイケルス*2

オランダ・ハーグの国立中央古文書館に、A・F・ボ

ードイン（一八二〇—一八八五）の弟、A・J・ボードイン（一八二九—一八九〇）の私信一六四通が保存されている。これはA・J・ボードインが一八五五年三月二二日から一八七四年一月三〇日の間に、バタビア、香港、出島、兵庫、アメリカ、横浜等の、彼の商業活動での長期海外出張中、本国の兄弟へ出した私信である。

オリジナルの手紙の行方は不明で、現在保存されているものは、第三者がタイプ化したオリジナルの要旨であるが、A三判で百頁を越す膨大な量の手紙である。

年度別では一八五五年 八通、五六年 一一通、五七年 一四通、五八年 一五通、五九年 一九通、六〇年 七通、六一年 四通、六二年 九通、六三年 一一通、六四年 六通、六五年 三通、六六年 七通、六七年 一二

通、六八年 三通、六九年 二通、七〇年 六通、七一年 一一通、七二年 七通、七三年 五通、そして一八七四年四通である。

この内、日本から発信された手紙は、一八五九年四月四日から、一八七四年一月三〇日に至る約一一〇通である。

そして、このタイプ化された要旨には、すでに索引がついていて、この手紙に出て来る来日オランダ医関係者の名前と回数は左記の如くである。

A・F・ボードイン	四一回
ブツケマ	三回
ブツケマツワートル（ブツケマ夫人）	七回
ファン・デン・ブルック	五回
ドンデルス（ウトレヒト大学生理学教授）	三回
エルメレンス	一回
ハラタマ	九回
ファン・デル・ヘーデ	一回
伊東	一回
マンسفエルト	一一回

松本 (Matamoto)

ミーエル

緒方惟準 (Ohata)

ボンペ

F・de・ロイトル (岡山藩医学館)

J・de・ロイトル (開拓使仮学校)

ボードイン書簡は、古いオランダ語で書かれているので、読むのが困難であるが、複数の協力者の手で、現在翻訳と意味づけが進行中である。

現在までに判読した興味深い内容を列挙する。

A・F・ボードインは一八六二年一〇月二八日午後三時(文久二年九月六日)に、上海からコロンビア丸で長崎へ着いた。入れ替りに、十一月一日(九月二〇日)ボンペは長崎を發つた。(一八六二年一〇月三一日付)

文久三年の正月には、A・F・ボードインは八日間正月休みをもらった。(一八六三年二月二七日付)

文久三年四月頃、騒然とした社会情勢の中、長崎の医学校はしばらく休校を余儀なくされた。(一八六三年六月一日付)

一回 A・F・ボードインは、自分のカメラで長崎の写真をとった。(一八六五年一〇月二〇日付)

二回 慶応二年二月から、二〜三ヵ月間の、A・F・ボードインの日本脱出は、従来言われていたような、オランダへの一時帰国でなく、ジャワのバタビア旅行であった。(一八六六年二月五日付、一八六七年三月二〇日付)

一回 慶応三年五月のオランダ帰国は、A・F・ボードインは、最初はアメリカ廻りで帰国の予定であった。(一八六七年五月一日付)

明治新政権は、慶応四年一月中旬より、A・F・ボードインの再来日を待っていたが、彼はロッテルダムにずっといた。(一八六八年一〇月一七日付、一八六八年十二月三一日付)

エルメレンスは、おそくとも明治三年五月一日までに兵庫に到着した。(一八七〇年六月二日付)

F・デ・ロイトルは酒乱であった。(各所)
幕末の長崎、横浜では日本人による掠奪のための、外人施設への放火が横行した。(各所)

長崎で、船から輸入品を下す際に、人夫の抜荷が目立つ

た。
(各所)

(*1 三菱水島病院 *2 ライデン大学医史学)

医師トーマスB・ダンの経歴

泉 彪之助

一九三六年五月三十一日、中国の文豪魯迅は、上海市虹口区の自宅で、アメリカ人医師トーマス・B・ダン (Thomas Balfour Dunn) の診察を受けた。この診察は、魯迅が作品「死」を執筆する契機になった点で重要な事件であったのかかわらず、このアメリカ人医師トーマス・B・ダンについてほとんど何も知られていなかった。

演者は、アメリカ医師会をはじめ関係者の好意により、トーマス・B・ダンの経歴をかかなりの程度にまで明らかにすることが出来たので、まだ調査は続行中であるが、現在までに判明したところを報告したい。

トーマス・B・ダンは、一八八六年五月五日、アメリカ合衆国カリフォルニア州ベンチュラに生まれた。父は、ロバート・ブロディー・ダン、母はマーガレット・マッケイで、両親ともスコットランド出身であった。